

【作業内容 (9月27日)】

- ① ジャン・プティ著、田路貴浩・松本裕訳『ル・コルビュジエ みずから語る生涯』(幼少から CIAM 付近まで読了) →ル・コルビュジエの人間性について知る
- ② ウンベルト・エコ、『論文作法』 →未だ研究の進め方がわからなかったため学習
- ③ 修士論文について (本用紙)
- ④ ZHLC スケッチ分析
参照：千代章一郎、『ル・コルビュジエの芸術空間 -国立西洋美術館の図面からたどる思考の軌跡』

【暫定目次構成】

【序論】
第1章 本研究について
1-1 研究背景と目的 (仮説)
1-2 研究方法
1-3 既往研究と本研究の位置づけ

【本論】
第2章 ル・コルビュジエ・センターの制作過程 (10月)
1-1 制作過程
1-1-1 素案
1-1-2 草案
1-1-3 基本計画案
1-1-4 実施計画案・実現案
1-2 生活空間における芸術の融合
1-2-1 平面構成における融合
1-2-2 立面構成における融合
1-3 小結

第3章 ル・コルビュジエ・センターと比較された住宅作品 (11月)
1-1 ZHLC に適応された2つのプロトタイプと生活との関係
1-2 建築的プロムナード
1-3 小結

第4章 ラ・ロッシュ・ジャンヌレ邸 (11月~12月)
1-1 概要
1-2 制作過程
1-3 小結

第5章 考察

【結論】
第6章 結論

資料編
・住宅作品リスト
・言説集

参考文献

【スケジュール】

- ・11月2日(火) ACDHT フルペーパー締め切り →結論：出さない
理由：分析を続けないうまま、書くことを目指してやってきたが、内容を伴わずに膨らましているだけの作業になって本末転倒。そもそも内容を絞って作った論文ではないため、書けることが少ない。
内容を詰めていく作業をやるべき
- ・12月2日(木) 修論 中間発表梗概提出
- ・12月6日(月) 修論 中間発表

第1章 本研究について

1-1 背景と目的

<文章>

ル・コルビュジエは『建築をめざして』(1923)において「住宅は住むための機械である」とし、建築作品の制作を通じて探究を繰り返し、数多くの住宅を実現させた。そこで**本研究は、ル・コルビュジエの思惟における生活に対するビジョンを明らかにするため(大目標)、住宅作品の制作に関して、ル・コルビュジエが建築と生活を結びつけるものとして捉えたもの(Ex.様式?)を明確にし、その上で生活空間に対してどのようなアプローチを行ったのかを明らかにすることを目的とする。(小目標)**

<メモ>

- ・生活についても一度再評価する必要<現代>
- ・近代史の中で変化した「生活」への態度とは何か
- ・「生活」という概念はいつ誕生したのか
- ・ル・コルビュジエは近代以前の「生活」に対してどう解釈して住宅へ落とし込んでいったのか
- ・そもそもコルビュジエが「生活」に関連した概念に対してどんな言及をしているのかについて調べた方がいい

1-2 (仮説)

<文章>

ル・コルビュジエにとって「生活」を規定する住宅は、様式などによって形作られているものであり、それが生み出す「芸術性」によって人間の精神と建築とを結びつけているのではないか。それが安心感や心地よさ、人間らしさを感じられる空間を生んでいる？
生活に芸術を結びつけることで、人間の精神に訴えかけられるような住宅を設計していたのではないか。

<メモ>

- ・ル・コルビュジエにとっての「芸術」という概念が生活に結びついているという仮説
- ・高品質な住宅供給が求められる中、生活・芸術をより多くの人々が享受できるように、「量産化」を目指した？
- ・そんなこと、論証できるのか？

1-2 研究方法

ル・コルビュジエの作品集スケッチ集、及び図面集に掲載されている図面・スケッチ及び言説を一次資料として用いる。**ル・コルビュジエ最後の住宅作品であるル・コルビュジエ・センターを対象として選定し、一次資料を基に、空間構成の変化から制作過程を分節した上で、空間の主題の変容について分析する。そこから「生活」に関連する概念を抽出し、関連作品の分析を行った後、比較分析により生活空間の設計理念を明らかにする。**

1-3 既往研究と本研究の位置づけ

<文献リスト> (もう一度読む)

- ・Catherine Dumont, Tim Benton, *Le Pavillon De Le Corbusier Pour Zurich*, denkmalpflege und bauforschung, eth zurich, 2013
- ・

第2章 ル・コルビュジエ・センターの制作過程(再分析中)

1-1 制作過程

- 1-1-1 素案
- 1-1-2 草案
- 1-1-3 基本計画案
- 1-1-4 実施計画案・実現案

1-2 生活空間における芸術の融合

1-2-1 平面構成における融合

1-2-2 立面構成における融合

1-3 小結

<全体メモ・疑問>

・そもそもなぜアトリエを配置することになったのか(アトリエが計画されているからとはいえ、それが平面的に結びついているだけでは「融合した」とはいえないのではないか)

・ル・コルビュジエのプロトタイプ住宅の考えの中に、「アトリエ」「展示室」は必要だったのだろうか。それともクライアントの要望としての機能にすぎないのか。後者であれば、平面計画における生活空間と芸術の融合は、ル・コルビュジエのビジョンとしてあったのではなく、偶発的にそうなったとしか言えないのではないか。

→どんな経緯でZHLCを建設することになったのか再度整理

- ・今後研究を進めていくうえで、フランス語の習得は必須

【質問】

ウンベルト・エコ、『論文作法』に関して

- ・批評書籍・論文(二時資料)を利用(引用?)する時とはどんな場面なのか。既往研究として調べる以外に、本論の中で引用する場合はあるのか。読書カードとして残した場合、その記録を論文にどう組み込むのかがわからなかった。

ANSWER

論文と新聞記事・レポートとの比較

<共通点>

他で書いていないことを書いている必要がある

<違い>

既往研究という蓄積に対して、この論文はどうか

↓↓
↓↓

- ・「明らかにされた事実」は既往論文から引用できる(同意できる点は同意する)
- ・自分の論文の独立性を見せるために引用する

昔の論文は批判する為でなくリスペクトするためにある
それらがあるからこそ自分はこんなことができたというスタンス。自分の研究が、既往研究がなければ成り立たないということがあるし、自身の研究がそうなることを目指すべき
気持ちの問題

【悩み・相談】

- ・ACDHT フルペーパーの文字数が約1000word 足りないが、残り1か月で追加分析→骨格練り直し→執筆→校正までどういう戦略で行くべきか
- ・やるべきこととして、屋上庭園の分析・記述を追加?

ANSWER

- ・原則は発表した内容で結論としては、出さなくてもいいのでは?

知見を今後の研究に活かす

新しい分析を追加するのではない

ここだけはわかったというのがわかればいいからやるのであれば限定していくような形で、今までわかってきたことを述べていく

<メモ>

ラ・ロッシュ邸

- ・室内装備の色彩、家具の配置は写真で拾ってはいるが、図面に落とし込んでいないのでその作業を行うことはできる。
- ・それ以外のことが出てくるかについてはちょっとわからない。

- ・論文としてつなぎやすいのはこっち

最初と最後にビフォーアフターで変わってきたというのを見ることができる

ロクとロブ

- ・板藤さんのやっていたものがまだまとまっていない、資料は膨大
- ・傘上屋根の代わりにボールドをのせているから、その意味を明確に
- ・芸術空間はあからさまに出てこないから、その意味も含めて考えていくのはどうか

- ・研究として、自分で解説していけるのはこっち

- ・集合住宅とか標準の問題とかに関わってくる

→ユニテとの違いにもつながる

- ・研究の広がりはある
- ・学会の論文などをあたってみる必要
- ・つながりという面では難しいと思うけど、「蜂窩」という意味ではつながっている

【次週予定】

- ・ZHLC スケッチ・図面分析
 - ・フランス語の勉強(基礎を学ぶ)
 - ・文字トレース→日本語へ

- ・伝記読了
- ・『論文作法』読了

- ・骨格変更(案として考える)
ZHLC
 - ・ZHLCの既往文献の訳・精読→建設経緯について整理
- ロク・ロブ
 - ・板藤論文分析
 - ・ロク・ロブについて資料をまとめる
 - ・構想経緯

- ・「生活」に関連した概念について調べる

【備考】

- ・田中さん製図Ⅲの指導
- ①直島ホール(集会所含む)の図面トレース
- (2)直島ホールを将来的にオフィスへと転換する計画案

To do

- ・直島ホールの図面、資料用意